

## 小林多喜二伝 補遺 8

倉田 稔

### もくじ

はじめに

小樽時代

- |          |                   |
|----------|-------------------|
| 1 多喜二の根元 | 2 新発見の小説「老いた体育教師」 |
| 3 周囲の人々  | 4 「三・一五」の印刷       |
| 5 雑      | 6 二度目の上京          |

プロレタリア文学運動

東京時代

玉の井 関西巡回講演 逮捕 若林つや子

麻布時代など 通夜

没後

北海道出身の他の同時代者たち

### はじめに

小生は、『小林多喜二伝』（論創社 2003年）を出し、その後、補遺の類を本誌、その他で書いた。それらは「補遺7」（『人文研究』128輯）に挙げたので割愛したい。なお、拙稿「多喜二の小説「春ちゃんの場合」の場合」（『言語センター広報』小樽商大、第21号）があり、ここには入れない。

## 小樽時代

### 1 多喜二の根元

小林多喜二の根源的な思想は何だったかについて、澤田章子は講演で、多喜二の人道主義は母譲り、と語った。

原絢一は、チマさん（小林多喜二の姉）の嫁ぎ先の人であるが、多喜二の母セキさんや姉チマさんは、困った人がいると助けてあげないわけに行かなかったと、語る。

### 2 新発見の小説「老いた体育教師」

庁商時代の体操教師について多喜二は小説を書いた。

曾根博義先生が、小林多喜二の小説を新しく発見した。「老いた体育教師」である。この経緯は、『舳板』（さんばん）第Ⅲ期 第13号、2007年3月、EDI発行、所載の曾根論文「雑誌『小説倶楽部』と小林多喜二」で紹介された。

全文は、日本大学国文学会『語文』127輯に曾根先生の解説と共に発表された。曾根博義「小林多喜二『老いた体操教師』の背景とモデル」（『語文』日本大学 国文学会 129輯）に出た。その後、曾根博義編『老いた体操教師 小林多喜二 瀧子其他』講談社文庫、に入った。

この小説のモデルは富岳丹次とし、その詳しい調査がなされた。

### 3 周囲の人々

小林北一郎は、小樽高商を出て、東京商大へゆく。火災保険に勤め、昭和19年結核で死ぬ。妹がたくさんいた。塩谷出身で整の先輩。妹の夫が塩谷村長をしたことがある。本間照光編で、小林北一郎『社会科学と保険論』あり。

小樽高商で、福田勇一郎の提案で、ストリンドベリを読むことになった。二寮で研究会を始めた。福田勇一郎の部屋であった。福田勇一郎は、朝日新聞社に入り、戦後は東京におり、その後、大阪本社の常務になった。この会が演劇研究会であろう。

多喜二の高商の同級生 中川三五は、札幌の明治生命（外務）に勤めたことがある。共産黨員になった。

小林多喜二は、高商時代、秋田県人会に入った。そこで彼は秋田についていろいろ知識をえた。県人会に入っていたのは、佐々木妙二、三浦強太である（村瀬）。

#### 4 「三・一五」の印刷

1928年、蔵原惟人の家へ小林多喜二は「三・一五」の原稿を送った。多喜二は1928年にちょっと上京し、蔵原、その他の人に会ったことがある。そして彼に信服していたから、原稿を直接送ったのである。蔵原は、プロレタリア文化研究所にいる立野信行の部屋にやってきた。立野は『戦旗』編集委員で小説担当であった。蔵原は、風呂敷包みの中からキチンと綴じた部厚い原稿を取り出しながら言った。「北海道の小林多喜二という人から送ってきた原稿だが、『戦旗』へ載せられるかどうか、読んでみてくれないか」。立野は小林多喜二名前だけは知っていた。<sup>(1)</sup>これが「一九二八・三・一五」だった。立野は読了し、粗雑な表現やナマな誇張をどうにかすれば、十分「戦旗」に発表できるものだと推薦した。「それじゃ、君が手を入れて『戦旗』のほうに回してくれよ」と蔵原は言った。

端正な書体の百数十枚、一字も消していない原稿であった。多喜二は、いつもそうするように何回も書き直したのだ。

立野は、当時の検閲ではどうしても通らないと思われる露骨な表現や言葉づかいを、x x や線で乱暴に削除した。最後の数枚は蔵原と相談して削除した。これは『戦旗』1928年11月号と12月号とに分けて掲載された。表題の「一九二八・三・一五」は立野が「一九二八年三月五日」と変えた。（立野、104-105ページ）

国崎定洞<sup>(2)</sup>が「三・一五」をドイツ語に翻訳した。ソ連で、国崎は山本懸蔵<sup>(3)</sup>に売られた。

## 5 雑

多喜二は東京を出る前、昆布温泉にこもって、「工場細胞」などを執筆した。それはどこか。当時存在したそのあたりの旅館は、鯉川温泉と青山温泉である。薬師温泉も近くにあったが、地元の人にはちょっと考えられないと。<sup>(4)</sup> 村瀬氏は鯉川温泉は違うようだとする。青山温泉かもしれないと、氏は推定する。

蜂谷涼『ちぎり屋』（講談社 2002年）で、大正時代の小樽を描いている。

大きなラッパ形の拡声器から1日中にぎやかな洋楽を流している日本蓄音器商会。女郎屋街の日蓄小路。妙見川をはさんで、芸妓の見番、俵屋、漆喰壁を黒く塗った粋な呉服店、風呂屋が並んでいた。小樽で最も花屋かな筋で、両側をしだれ柳が並んだ。活動写真館・神田館があった。酒は、北の誉、虎正宗、しら梅、花吹雪、稲川、寶川があった。小樽で名水がわいた。馬糞風＝南風が起きた。火事と喧嘩が多かった。

1月2日は初荷である。店の名入りの轆をたてた馬そりに積まれて荷が運ばれる。人力車も馬車も冬はそれぞれ車輪をはずしてソリになる。それらは雪道のために、よく倒れた。花園町の洋食屋でライスカレーが50銭というのが出た。大正9年に赤バスが、10年に青バスが走った。客馬車もそのため低迷した。タクシーもこのころだった。

昭和5年9月24日、東京文理大での大会で、小樽庁商が剣道で全国優勝したとき、提灯行列があって、「緑ヶ丘永遠なれよ」という直島一郎教諭作曲の音楽をハーモニカで吹奏しながら、次ぎ次ぎとクラス毎に工夫した行燈が行った。（田中孝手紙）

昭和5年の頃、小学生の田中孝は、高商を訪れた。高商の正門に近い坂の両側は熊笹で、上がって行くと右側に食堂が一軒あった。学生相手の食堂であった。正面玄関から入って、二階の方へ螺旋階段があった。（田中孝手紙）

眞壁睡溪先生が、次を見つけた。滝子が勤めた小野病院は、小野弘介院長

の病院で、現在なくなっている。滝子が勤めた旅館は、つるや旅館で、駅前であるが、当時は、1つ通りを海側へ下がったところにあった。

1927年5月27日、多喜二は桜井と寺田と3人で「公園」へ行って飲んだ。それから「キンタ」へゆき、「鈴蘭」へいった。この3つは店である。タイムス（女給のあだ名）との話がでた。桜井は彼女に惚れている。彼女は小樽を去って札幌へ行った。「鈴蘭」にはブッターという女給がいた。

## 6 二度目の上京

『蟹工船』が戦旗社から単行本として出版された。日本プロレタリア作家叢書の第二編としてだった。戦旗社は『戦旗』の発酵のほか、単行本の出版もしたのだった。多喜二は出版部に顔を出した。小樽からわざわざ来たのであろう。多喜二に、多喜子は親しげに話しかけてきた。着流しに大島紬の裾からやせた足がのぞいていた。小柄な身体に似合わず、精力的な饒舌家であった、と多喜子は思い出す。（『わたしの神戸 わたしの青春』三信図書）

『蟹工船』はすばらしい売れ行きになった。三万五千部ほど売れた。ところが小林多喜二はその印税をびた一文もとらなかった。（江口渙『たたかひの作家同盟』上）。詳しくはほんの少し違うが。

山田清三郎は、『蟹工船』では天皇陛下と献上品のところを次を伏せて出した。しかし発行兼編集責任者の山田清三郎は、検閲係長橘高広により警視庁に呼び出され、さんざん文句を言われた。不敬臭いというのだ。だがどうにか発禁は免れた。「3・15」は発禁を喰った。多喜二は筆者として睨まれていた。単行本の『蟹工船』を出すとき、出版部長の宮本喜久雄が伏せ字を両方ともおこしてしまった。山田はまた警視庁に呼ばれ、これは発行禁止となり、伏せ字を条件に重版は了解された。その後伏せ字をおこして発行した。三度も警視庁に呼ばれ、ついで山田と小林多喜二は不経済で起訴された。多喜二が北海道からやってきた。二度目の上京だった。彼は初めの上京では蔵原と山田と会った。

多喜二は山田の家で裁判に対する打ち合わせをした。「まあ、一、二年やられるだろう」「中のことが書ける」二人はそういって笑い会った。伏せ字をおこした『蟹工船』はすでに二万部以上売り切れていた。この時は、検挙されなかった。山田と小林多喜二が検挙されるのは1931年であった。(山田清三郎『プロレタリア文学風土記』125-7ページ)

壺井繁治は多喜二のこの上京時、多喜二と直接顔を合わせた。昭和4年の秋ころで、多喜二がついでに日比谷にあった戦旗社の事務所を訪れた時であった。当時戦旗社の全責任者であった壺井は、彼に印税を払おうとしたところ、多喜二は「自分は月給生活者としてそれほど不自由していないし、戦旗社はこれから事業を拡大するにつれて金があるだろうから、百円だけでもらって、あとの印税は全部寄付する」と申し出た。初版は一万五千部印刷され、飛ぶような売れ行きをしめしていた。壺井は、多喜二が個人生活より運動の重要さをより深く考えている人間であることが伝わり、痛く感動した。(『壺井繁治全集』第4巻、青磁社、612ページ)

## プロレタリア文学運動

1924年6月に、雑誌『文芸戦線』が創刊された。多喜二はこれを読んでいた。ここには平林初之輔、青野季吉が論説を書き、黒島伝治、平林たい子らが作品を寄せ、有名な物としては、葉山嘉樹(1894-1945)「淫売婦」などが出た。蔵原惟人(1902-1991)は1925年に半年ソ連に留学し、帰国後、『文芸戦線』の同人になる。1925年に日本プロレタリア文芸連盟が発足し、10月、発起人総会あり、多数のグループが集まった。12月に創立大会が開催された。『文芸戦線』はその実質の機関誌になった。

東京帝大に新人会があり(1918年結成、1929年解散)、マルクス主義芸術研究会がその中にあり、それは林房雄(本名、後藤寿夫)らが中心だった。新人会は東大生が中心だが、学外からも参加者がいた。彼らマルクス主義芸術研究会員は全員、日本プロレタリア文芸連盟に加盟した。

その後、プロレタリア文学運動は、1927年に分裂し、労農芸術家連盟（葉山など）、日本プロレタリア芸術同盟（中野重治（1902-1979）など）、前衛芸術家同盟（蔵原惟人、など）になっていた。福本イズムに影響された鹿地亘や中野重治が日本プロレタリア文芸連盟を批判し、日本プロレタリア芸術同盟が作られたのだった。

1926年から27年は福本主義が全盛で、共産党内外に影響力を与えた。マルクス主義芸術研究会ではほとんど福本主義になっていた。ここには中野重治、久板栄二郎、鹿地亘、佐野碩、川口浩、千田是也、斧宮吉、関鑑子らがいた。

日本プロレタリア文芸同盟では理論闘争が始まった。1927年2月に鹿地の『無産者新聞』での論文で理論闘争が起きた。芸術運動を機械的に政治活動に結びつけ、これを革命化させようとするものと、政治闘争への結合は反対ではないが、芸術の特殊性を擁護するものとの戦いであった。この理論闘争は当時の福本主義の影響の下で、日本プロレタリア芸術連盟はついに分裂するに至った。脱退派は1927年6月、労農芸術家連盟をつくった。こういう分裂は避けられたし、避けねばならなかった、と山田清三郎は言う。日本プロレタリア芸術連盟からアナキスト系の日本無産派文芸連盟が前月に分裂していた。

福本和夫（1894-1983）は、東大を卒業し、松江高校教授となり、1922年に英独仏に留学した。カール・コルシュのもとで学んだとされ、ルカーチの「歴史と階級意識」の影響を受けた。1924年に帰国し、山口高商の教授になった。1926年の『マルクス主義』での論文で日本で影響を与えた。同年12月の第三回大会で日本共産党の指導部に入り、中央委員・政治部長になる。

福本イズムとは、大正14年から昭和2年ころ、日本共産党内にあらわれた福本和夫を中心とする左翼冒険主義である、とされる。労働者階級の政治闘争には、理論闘争によって異分子を分離し、純粋分子のみを結合しなければならないという「分離結合」理論である。少数のインテリゲンチヤ集団として大衆組織を孤立させてしまう傾向を持つ。（『日本の文学』39、中央公論。

520ページ) この福本主義によって党内外で弊害が出た。だが「27年テーゼ」<sup>(6)</sup>が出て、福本イズムは批判され、福本は失脚する。だがその間、共産党内で一世を風靡した。コミンテルンの「27年テーゼ」で、右の山川主義と並んで、左の福本主義が批判された。いわく、「だが最近共産党内に同志クロキ（福本和夫のこと）を担当者とする他のそれ（山川主義のこと）と反対の傾向が大なる勢力を得た。」「党をプロレタリアートの大衆組織から孤立させることとなる方針を採ることも亦それに劣らず誤りである。同志クロキの提唱する「分離結合」の理論は事実上かかる方針を基礎づけたものに外ならない。それはレーニン主義とは決定的に又根本的に矛盾している。」「同志クロキは、人為的に勝手に描き出した抽象的影像から出発し、現実の関係を明らかにすべく努力する代わりに理論的範疇の提起と調和の遊戯に耽つている。」(コミンテルン『日本問題に関する方書・決議集』1950年、五月書房版、30、31ページ) 福本はコミンテルンに出席し、これを知り、腰を抜かすほどびっくりしたが、コミンテルンの権威の前に何も言わずに屈服した。レーニン主義に立てば、これはレーニン主義とそれほど違いはなかった。それに日本ではどうして誤っているのかよく議論せずうわべだけ福本主義を撃ててしまった。こうして福本主義の精神は将来に亘って残る。

1926年11月日本プロレタリア文芸同盟は第二回大会を持ち、この月、労農芸術家連盟が前衛芸術家同盟とに分裂することになった。これは「27年テーゼ」の「日本問題」を蔵原が訳して発表し、これがきっかけを作った。テーゼは山川イズムと福本イズムを批判していた。これで山川イズム派とテーゼ派に分かれた。テーゼに反対する派＝山川派＝労農芸術家連盟と、賛成派に分かれたのである。

1928年1月、前衛芸術家同盟は、その機関誌として『前衛』を創刊した。第1号で、蔵原は、プロレタリア芸術運動の統一を提唱した。全左翼芸術連合という提案は、日本芸術連盟に受け入れられた。1928年1月25日にその初の準備会があり、3月13日、日本左翼文芸家総連合が創立大会を持った。前縁芸術家同盟と労農芸術家連盟と小さな多くの団体と個人加盟があつて、

合体した。

ここで3・15事件がおき、3月25日に、この組織は全日本無産者芸術連盟(ナッブ)となった。4月29日に創立大会があった。

『文芸戦線』に依拠していた労農芸術家連盟は、これに参加しなかった。

多喜二は、前衛芸術家同盟に加わった。そして全日本無産者芸術連盟(ナッブ)に移った。

1930年ウクライナのハリコフで、プロフィンテルン(赤色労働組合国際ナショナル)<sup>6)</sup>第五回があり、蔵原は日本代表の通訳として出るよう、共産党委員長・田中清玄に指示され、7月ころ日本を出た。8月にその大会があり、11月に革命作家の国際会議があり(蔵原は出ない)、1931年2月に彼は帰国した。新しい理論をひっさげてきた。このプロフィンテルンに出た者は、紺野与次郎、風間丈吉、児玉静子(風間の妻)、飯島喜美、蔵原、南巖らであり、プロフィンテルンの委員で在ソの山本懸蔵もでた。蔵原のロシア語は役に立たなかった(風間丈吉)。これに引き継いで1930年11月に、国際革命作家同盟のハリコフ会議があった。蔵原はなぜかこれに出席しなかった。本来この会議が蔵原にとって本来的なもののはずである。そこで勝本清一郎が報告した。

蔵原は帰国後、文学の大衆化を提唱した。プロフィンテルンで聞いてきた物だった。ここで新しく、日本プロレタリア文化同盟(コップ)が1931年11月に結成された。日本プロレタリア作家同盟(ナルプ)が作られ、他の芸術ジャンルにも作られた。村山知義や佐々木孝丸らのプロレタリア演劇、日本プロレタリア美術家同盟(ヤップ)も作られた。その後、労芸は1932年に解散し、1934年に、作家同盟も解散した。

蔵原は1929年に田中清玄(党委員長)の推薦で入党した。多喜二は初めに蔵原の入党前に出会ったが、蔵原がてっきり党员だと思っていたのではないか。蔵原は1932年に検挙され、刑期を務めてから1940年に出獄した。多喜二の小説「党生活者」にヒゲという名で出てくる。

中野重治は東大に入り、新人会に加わる。1925年学内のマルクス主義文芸

研究会に入り、1926年プロ芸にマル芸が参加したのでそのまま参加した。そして彼はその中央委員に選ばれる。中野は1927年に東大を卒業。福本イズムに影響され、そのラディカリズムが原因で、1927年、青野、葉山、林房雄、蔵原は、プロ芸を脱退する。林と蔵原は1928年プロ芸（中野ら）と再び合体し、ナップを結成する。

中野は、女優原泉と結婚した。中野鈴子は彼の妹である。彼は1931年入党し、その後検挙され、1934年転向した。

鹿地亘（1903-1932）は、本名瀬口貢。東大で新人会に入る。林房雄や中野重治たちとマルクス主義芸術研究会を主宰し、福本主義に強く影響される。そしてプロ芸に入る。1928年ナップに参加する、そのままナルプにも入り、書記長になる。1932年に入党し、33年に検挙され、その後転向する。

上野壮夫は昭和初年、『戦旗』の編集責任をしていた。小坂多喜子はその出版部に働いていた。2人はそのため職場結婚をする。

『戦旗』は1928年5月から1931年12月まで全41号出た。初代編集長は佐藤武夫で、彼は早稲田大学建築科を中退した。1929年4月3日に肺炎で没した。佐藤時代に上野壮夫はこの編集に加わっていた。戦旗編集長は佐藤武夫、その後、山田清三郎で、立野信行は「戦旗」の小説部門の編集委員だった。その後編集長になる。

日本労農芸術家連盟に大きな分裂が起こった。1930年3月、岩藤雪夫の代作盗作事件が起き、問題が大きくなった。その上、その盗作問題が「国民新聞」に出てしまった。誰かが売ったということになり、不満な人々が出てきた。黒島伝治、今野大力、今村恒夫らが、文戦打倒同盟を作った。そこで幹部は彼らを除名した。11月24日、暴力刃傷事件が発生し、文選打倒同盟の人々は一斉に作家同盟に合流した、その後あたらしい分裂が起こり、その一団がまた作家同盟に合流した。中条百合子が1930年11月に外国遊学から帰国し、12月に作家同盟に入った。こうして作家同盟はさかんになった。一方、労芸は落ちぶれた。

- (参考文献) 山田清三郎『プロレタリア文学史』上下, 理論社  
山田『プロレタリア文学風土記』青木新書  
山田『プロレタリア文化の青春像』新日本出版  
江口渙『たたかひの作家同盟記』上下, 新日本出版

## 東京時代

小林多喜二が上京したのは、昭和5年3月末であった<sup>(7)</sup>。立野信之<sup>(8)</sup>はそのころ杉並に一戸をかまえたばかりであった。そこへ上京早々、多喜二が訪ねてきた。東京での彼の仮寓は、中野の斉藤次郎宅であった。

実際の多喜二に会って、その印象のチグハグなのに立野は驚いた。彼は色こそ白いが痩せた小男で、出眼に近い眼がぬれて睫毛が固まったように見え、やや厚めの唇を田舎者然とだらしなくあけて、がさつな嗚れ声で話す。田舎弁丸出しである、と立野はいうが、北海道弁のはずである。古ぼけた焦茶の洋服をきて、股にツギのあたったスポンを穿いている。

寒い夕方で、立野と友人の橋本英吉<sup>(9)</sup>とで、近くのそば屋へ遠来の珍客を案内した。板わさで酒を三、四本飲み、なべ焼きうどんを食った。

多喜二は馴れない都会生活に疲れたのか、何か元気のない顔つきだった。しじゅうツギのあたった股ぐらへ両手を突っ込んで、上体をフラフラさせながら、きれぎれに喋った。

立野は多喜二に無遠慮に「いっそのこと、このまま東京に住んだらどうかね」と言うと、彼は上体をフリながら、「いやア、オレみたいな田舎者は、東京へ出てきたら駄目になる。東京はおっかなくて・・・」と、齒の欠けた口を大きくあけて、笑った。慧眼な立野はそれを、真実半分、おおげさ半分に聞いた。(立野、136ページ)だがそうではなく、半分自嘲の冗談であり、多喜二は東京に出てくる魂胆であった。

数日後に、徳永直が小林多喜二に会いに、立野の家にやってきた。徳永直(とくなが すなお 1899-1958)は、熊本で、貧しい小作人の長男として

生まれ、学校も碌にでられなかった。労働運動に加わる。1922年上京し、植字工になる。印刷争議で、敗れ、解雇される。1929年、この体験を「太陽のない町」として『戦旗』に連載し、有名になる。1933年、多喜二虐殺など弾圧を体験し、蔵原理論を批判するなど、プロレタリア作家同盟を脱退した。

徳永はインバネスを脱ぐと、ドテラに羽織といういでたちだった。彼は小林多喜二とともにプロレタリア文学の双壁としてジャーナリズムから扱われていた。だから小林にしろ、徳永にしろ、2人ともにひそかにライバル意識を燃やしていただろうと、立野は想像する。

小林は股にツギのあたった洋服をきて、あぐらをかき、股倉に両手を突っ込んでいた。「小林君だよ」、立野は徳永にそう紹介すると、徳永はジロジロと小林をみつめ、顔を上向き加減にポカンと口をあけていたが、やがてシバシバと眼をしばたいたと思うと、「君は本物の小林君か」と、大真面目にたずねた。かたわらに橋本英吉も同席していて、笑いながら、

「本物だよ、おれが証明するよ」と口添えした。

「そうかねえ・・・君が小林君・・・?!」

徳永がまた口をあけ、感に堪えたような顔で小林をじっと見返したので、大笑いになった。(立野『青春物語』、137ページ)

小林多喜二が上京した時、彼の文学上の指導者・蔵原惟人は合法面から去り、蔵原に会えないことをひどく悔しがった。「残念だな・・・オレは、蔵原惟人がいてくれないとダメなんだ。」小林は何度もそれを口にした。小林は立野に向かって、「君は、とにかく蔵原惟人と、たとえ一時でも同じ家で暮らしてたんだから、果報者だよ」とまで言った。

それから間もなく、『戦旗』に佐藤耕一「ナップ芸術家の新しい任務」という論文が現れた。筆者は地下にもぐっている蔵原だということがすぐ分かった。「この筆者は蔵原惟人だ・・・奴は、やっぱりやるなア!」と、小林は大げさに言って、まるでその論文と格闘でもしかねない意気込みで、ウンウン呻りながら読みふけた。小林の持っている「戦旗」の論文は、アンダーラインだらけで真っ赤だった。

その論文が出るとまもなく4月6日に日本プロレタリア作家同盟の第二回大会が開かれた。委員長に江口渙，書記長に立野，中央委員に小林多喜二ら選ばれた。多喜二は北海道に居住しているので，客分のような形で（と立野は勝手に思う），北海道地区の文化活動について報告することになった。会場にいる同盟員の大部分は小林多喜二の姿に接するのははじめてだった。小柄な小林が外開きの足取りで演壇にあがるや否や，切迫した空気の中でさかんな拍手が巻き起こった。（立野，139ページ。）

立野に言わせると，こうだ。

警視庁の特高課の連中も，「小林って，どんな男だ？」といった顔つきで，廊下から背伸びして見守っていた。

その歓迎の拍手をあびて，小林多喜二はテーブルの端を両手でつかんだ。すると胸をそらせて，肩を怒らせた格好になった。小林は上体を前に乗り出し，肩をふって，嗚れ声で喚くようにはじめた。

「諸君，北海道の同志たちは，かの三・一五事件以来，地下へ，地下へと，潜って行ったのであります・・・」

切ってならべるような生硬な言葉で，小作争議か港湾労働者のストライキでアジ演説でもやるような調子だった。それでも小林の報告演説は，別に臨検の中止も喰わずに，十分間くらいで，無事に終わった。（立野，140ページ。）

しかし江口は違った叙述をしている。

小林多喜二が小樽を引き払って東京に移り住み，いよいよ自分たちといっしょになって仕事をすすめるということを知ったとき，中央委員といわず，平同盟員といわず，双手をあげて歓迎した。作家同盟内における彼の人気は，このようにまで，それこそ圧倒的に高まっていたのである。（江口『たたかひの作家同盟』上，244ページ）

第二回大会は4月6日午前10時から，本郷の帝大仏教青年会館で行われた。江口が議長に選ばれ，参加者は150名を越えていた。

たしか午後になってから，小樽から上京してきた小林多喜二がはじめて姿を見せた。何となく田舎っぽい型の服をきた彼を江口が議長席から紹介する

と、全会場にはたちまち割れるような拍手がおこり、「わあっ」という歓びの声さえ嵐のようにわき起こってしばらくはやまなかった。

そこで江口が小林多喜二に「ここにいる同志たちとは、はじめて顔を合わせたのだから一言挨拶をしてほしい」とたのむと、彼は顔をまっかにしてすっかりはにかんでしまった。そしてしばらくはなかなか挨拶をしようとしない。

江口が何回かくりかえしくりかえし頼むと、ようやくのことで口を切った。ところが一たんしゃべりだすとなかなかの雄弁である。それに小柄の体わりによくとおる声ができる。彼は挨拶の中でその少し前に久板栄二郎が書いた脚本の中で天皇制批判を巧みにおこなったことについて、その内容にはふれないでただ脚本の名だけをあげたあと、

「われわれもこれまでのように、ストライキやデモだけを書くのではなく久板君の書いたあの脚本のようなテーマ——あれをわれわれの作品のなかで、もっと積極的にとりあげなければいけない。われわれの文学のポリシェビキ化にとってあの問題こそ何よりも大切なテーマであるのだ。」

と、いいきったときには、みんなは思わず感嘆の声を上げた。ことに警視庁から特高課のナツ係の警部中川成夫が会場にきている。その目の前で天皇制批判を必要をきわめて巧妙にいつてのけたその話術のうまさ、大胆さに、あらためて全会場をゆるがすほどの拍手が起こり感嘆の声があがる。しかもそれが「しばらくは鳴りもやまず」という言葉どおりあとからあとからとくりかえされる。(江口『たたかひの作家同盟』、上、246ページ)

この作家同盟第二回大会で、江口は中央委員長に選ばれた。前任の藤森成吉がドイツへ行ったからだ。

立野は言う。小林自身は、演説には相当自信があるらしく、2千人あまりの聴衆を前にして、三〇分か1時間、大演説をやったと、自慢げに立野に後日話した。小樽時代であろう。「オレ、聴衆をうならせてやったよ。オレの声、これでも案外よく透るんだよ・・・自信を得たよ」そんな時の小林多喜二は、子供のようにムキ出しで、稚気愛すべきものがあつた。(立野、140ページ)

小林は、うならせるとか、作品でヒットを打つとか、ホームランを飛ばす、

というような言葉が好きで、座談の間によくそれを使った。彼はそうなることを望んであらん限りの精力をぶちまけ、体当たりでぶつかって行ったのだ。

ある日、立野の家で腹這って新聞を見ていた小林が突然、「黒枠、黒枠……」と、素っ頓狂な声をあげた。

「黒枠って、何だい？」

「これだよ、これ……」小林は起き直って、あぐらをかき、新聞半頁大の「改造」だか「中央公論」だかの広告を指さした。見ると、老大家の名と小説の題名とが、白ヌキで大きく出ていた。小林はその白ヌキを「黒枠」というのだった。

「それがどうなんだい？」

「オレ、これになりたくて……なりたくて……」歯の欠けた口をあけて、はにかみ笑いをした。

「アハハハ……！」そばにいた橋本英吉が禿頭をあげて赤ん坊のような笑い方をした。

「いや、ほんとだ」小林は顔を赧らめながら、憤ったような口調でいった。

「ほんとに、オレ、これになりたくて……なりたくて……！」

作品でホームランを飛ばして、新聞におおきく広告される。そういう作家になりたい、というのが小林のいつわらざる願望であったのだ。(立野、141ページ。)

しかし、どうだろう。立野も書いているが、多喜二は1929年に『中央公論』に「不在地主」を出し、1930年4、5、6月に『改造』に「工場細胞」を出しているわけだが。

多喜二の愛人・田口滝子が、小樽から東京に出てきた。1930年の4月である。多喜二は彼女と東京で数週間暮らした。多喜二は彼女を美容学校へ入らせようとした。しかしそれは多喜二の希望であって、滝子の希望ではなかったらしい。多喜二は彼女の将来のために思ってしきりにそれを奨めたのだが、事はうまく運ばなかった。

「どうも彼女は学校へ入るのはイヤだ、というんだがね・・・」と多喜二は困った顔で、立野にそう告白した。多喜二は、小樽で滝子と同棲したがうまく行かなかったことを、立野にすでに語っていた。(立野、142ページ)

立野は、多喜二が帰省をのぼしていたとするが、実際は多喜二は東京に出て活動することを望んでいたから、立野は誤解している。ジャーナリズムの発展度合いで、東京の方がよかったのだ。

ある日、銀座かどこかで読売新聞の河辺確治に出会ったところ、河辺がいきなり、「おい、小林君・・・君のような田舎者が東京に長くいたらダメになるぞ。早く北海道へ帰ったほうがいいぞ」と、言われた。

多喜二はそのことを立野に話して、「河辺にやられた・・・いや、河辺の言う通りだ。オレは東京にいたら、ダメなんだ・・・早く北海道へ帰って、小説が書きたい」(立野、143ページ)と言った。立野は「本音であつたろう。」とするが、立野は多喜二に騙された。

## 玉の井

多喜二らが大阪へ巡回講演にゆく前だった。貴司山治が「中央公論」から頼まれて、田舎者のプロレタリア作家小林多喜二に東京の盛り場を見せて歩くの記を書いた。

その時、貴司は方々を見せて歩いた後、玉の井（戦前の、東京市向島寺島町、現・墨田区東向島）の私娼窟へ小林を案内した。すると田舎者の小林多喜二は、ものめずらしそうにチョコマカと一軒一軒のぞいて歩いていたが、そのうちに、「あッ、断髪がいる！」と、頓狂な声をあげた。当時のモダン・ガールだ。そのうちに気に入った女を見つけたらしく、「オレはここにする。君はどっか適当に見つけてくれ」そういいのこして、さっさとその家の中に入ってしまった。

多喜二は大阪から帰った直後に、立野を玉の井に案内した。

「オレ、貴司を担いでやった・・・玉の井は、おれは詳しいんだ。」どうやら小林は、上京するたびに玉の井を利用していらしい。(立野、148ペー

ジ)

### 関西巡回講演

5月<sup>(10)</sup>下旬に「戦旗」防衛巡回講演会が大阪や京都で開かれることになった。その頃はもう「戦旗」は度重なる白金の弾圧で、財政的にも、組織的にも危険に瀕していた。それを読者大衆との結びつき——いわば組織の力で防衛しようというのだった。<sup>(11)</sup>

講師の顔ぶれは、書記長である立野の選定に任された。立野は駆けずりまわって、江口渙、片岡鉄兵（平）<sup>(12)</sup>、中野重治、貴司山治、大宅壮一、小林多喜二といったメンバアを揃えた。

立野が最後に小林に交渉すると、彼は睫毛の濡れた眼をグルっと大きくむいて、「オレに行けって？ おい、おい、それじゃ、オレはますます北海道へ帰れなくなるじゃないか」

「帰れなくとも仕方がない。作家同盟を代表する書記長の命令だ・・・行ってくれ」

「命令・・・とあれば仕方がない、じゃ、ま、行くよ」

「『戦旗』防衛三千円基金」募集運動で、多喜二らが関西入りした。その巡回講演の日程はこうである。（「多喜二の足跡を追う（1）」）

5月17日 京都 三条・青年会館，聴衆 7～800人。多喜二は女学生のサイン攻めにあった。女学生や女性の聴衆が最前列に陣取り、多喜二の演説が終ると、控え室の入口でサインを求め、多喜二は照れて奥へ逃げ込んだ。多喜二の人柄、女性観とともに、女性の人気のある少壮のプロレタリア作家の新登場として迎えられた。

18日 大阪 本町・実業会館，聴衆 1000人あまり，右翼青年団が騒いだので、つまみだす。

19日 神戸山の手・青年会館，聴衆 7～800人，講演会後の茶話会にも 4～500人が押しかけた。

20日 山田（現・伊勢市），聴衆 4～500人，官憲による中止・解散。

21日 松阪，官憲による中止・解散。

22日 多喜二，大阪の工場地帯視察のため，貴司と港町駅にもどる。<sup>(13)</sup>

この際の募金箱が現存している。

大阪の講演が終わって貴司たち一行はタクシーで戎橋のそばまで行き，夜の大阪を見物した。橋のそばでタクシーから降りた小林は，昼をあざむくばかりのネオンサインのかがやきにすっかりドギモをぬかれて，「君。大阪は今晚おまつりなの？」と貴司にきいた。片岡鉄兵は腹をかかえて笑い出した。

この話を，立野は，小林のそれはどこまで本気か，茶目か，わからないところがある，とする。(立野，148ページ)

楽天地散策中，島の内署の高等主任により拘引され，一旦釈放された。

23日 片岡鉄平と多喜二だけが大阪島の内署に検挙され，多喜二は16日間勾留された。

大阪府警察部のねらいは片岡鉄兵だと分かった。小林多喜二はたまたま片岡と同宿をしていたので，その巻き添えをくった。だが小林を拘引してみると，「三・一五」の著者だとわかったので。警察は腹いせに，必要の無い多喜二を一五日間も留置し，その間ありもしない日本共産党との関係を調べたり，拷問にかけたりした。だが小林多喜二は拷問に堪え，敢然とたたかってついに釈放された。

立野は片岡夫人を大阪に直行させた。しかし彼女は，片岡が泊まっていた旅館＝ホテルに宿をとったものの，何をどうしたらよいかわからず，ただマゴマゴしていた。そこへ釈放された小林多喜二が来た。「奥さん，大丈夫ですよ，鉄兵さんは元気でたたかっていますよ。」小林は，そう片岡夫人を勇気づけたものの，片岡のあの生白い弱々しい体では，あのはげしい拷問には堪えられまい，とひそかに思った。

数日間，小林は片岡夫人と同じ宿＝ホテルですごした。警察になれない夫人に付き添って，警察に差し入れに行ったりした。島の内署には，片岡が郷里の岡山県で小学校の代用教員をしていた頃の教え子だという刑事がいた。

小林はその刑事をつかまえてからかった。「おい，君・・・，昔から，師

の影は三尺さがって踏まず、という教えがある。君は片岡鉄平先生を大事にして上げないと、師弟の道にそむくぞ！」片岡はしかし共産党との関係で起訴され、大阪刑務所の未決へ廻された。(立野, 150ページ)

その後、小林多喜二は片岡夫人とともに帰京した。

小林は意気軒昂たるものがあつた。「オレ、自分の小説を大阪で実地にやられようとは思わなかつた。しかし、オレの体は弱そうで、これで案外丈夫なんだ・・・オレ、自信を得たよ」。小林はやせて生白い腕をまくって見せながら、警察での拷問に堪えた自分を、誇らしげに語つた。

小林多喜二が大阪から帰つてきたとき、立野の妻は、貧乏生活に腹を立てて、千葉の実家に帰つてしまつていた。立野はできることなら別れようと思つており、ヤモメ暮らしだつた。多喜二はそれをきき、一ぱしの経験者らしい顔つきで、「君、別れるんなら、このまま呼ばない方がいいよ」といつた。小林は半ば立野の妻がいないのをいいことにしてそのまま同居してしまつたのである。(立野, 158ページ。)

立野信之は杉並の成宗に、橋本英吉と背中合わせに住んでいた。近所に鹿地亘がいて、その家には美しい妹・ひろ子が同居していた。彼の妻は河野さくら、で、共に音楽家同盟に参加していた。2年後に離婚する。

ある日、鹿地が立野の家に来て、小林多喜二も一緒に雑談していた。そこへ河野さくらが飛び込んできた。「鹿地亘・・・！」と、さくらは呼び立てた。家政問題であつた。これが解決し、2人が帰ると、小林多喜二は、「鹿地亘・・・か」と、さくらの口真似をして、笑い出した。田舎者の小林には、さくらが亭主の鹿地に向かって呼び捨てにしたり、「鹿地君」と、同僚扱いしたりするのが、よほど奇異に感じたらしい。たびたびさくらの口真似をしては、どうにも納得の行かない顔で笑つた。(立野, 150ページ)

小林はよく物事を秘密にする男だつた。はじめは隠していたが、北海道の家で1ヶ月間同棲していた田口滝子と、表面は別れた形になっていたが、その実ずっと交渉がつづいていた。「オレ、滝子に逃げられた時、泣いたよ・・・泣けて、泣けて、しょうがなかつた。雪の中を駆け回つて泣いた。」

小林は人一倍純情で、田舎者らしい素朴な感傷癖を多分に持ち合わせていた。

阿佐ヶ谷駅の近くに、ピノチオというシナ料理屋があった。店には生ビールがいつも置いてあった。小林多喜二も立野と一緒に何度か生ビールを飲みに行ったが、そのうちに行くのをいやがり始めた。「あの店は、わざわざビールの泡を立てて量をゴマ化すから、厭だ」(立野、161ページ)

小林多喜二は、鹿地巨夫婦とその妹との3人のオモチャのような生活ぶりだが、よほど奇異に思われたらしく、朝起きるとすぐ鹿地たちの話をする。何だか特別に興味を持っているような様子だった。

「そんなに興味があるなら、つぶさに拝見したらどうだ」と立野がいうと、「よし、行こう」と小林が膝をあげる。だが鹿地の家の前まで行くと、どういう訳でか、「オレ、駄目だ」といって、あかい顔をして逃げ帰るのである。このことを河野さくらに話すと、さくらも幾分顔をあからめながら断髪の頭をふっていった。「小林さんは、うちのひろ子が好きなのよ。」(立野、164ページ)

築地小劇場で、久しぶりで左翼劇場に公演が開かれた。その初日に、立野は橋本英吉や小林多喜二と連れだって見物にでかけた。劇場で鹿地たちに会い、帰りは一緒に、阿佐ヶ谷のピノチオに寄ってビールを飲んだ。それから暗い、あまり人通りのない道を一塊になって帰った。

河野さくらとひろ子は、音楽同盟で鍛えた歌を合唱した。2人とも声がきれいだっただ。小林は妙にはしゃいで、女たちの後でふざけたり、前へ駆け出したりして、子犬のようにチョコマカしていた。

家へ帰っても、小林はまだはしゃいでいて、なかなか寝ようもしない。

そのうち何を思ったか、急に、「これから鹿地の家を襲おう」と言い出した。

仕方なく、立野は小林の後について行った。小林多喜二は暗い玄感に近づきざま、ドンドンと格子戸をたたいた。「どなた・・・だれ？」奥のほうでさくらの声がして、やがて玄感に灯がついた。格子戸のガラスにさくらの影が映った、と見るが否や、小林は物も言わずに一目散に逃げ出した。

「あれだよ、あれ」立野は、家の路地へ駆け込もうとしている小林の後姿を指差した。さくらたちは何で多喜二が戸を叩いて逃げ出したのか、よくのみ込めないらしかった。「まあ、どうしたの？」訝るさくらたちをに手を挙げて「失敬・・・」、立野はきびすを返した。

家へ入ると、小林は足を投げ出して、青い顔をし、「失敗失敗・・・」とあえいで、しきりに胸を叩いた。それから2人はまた話しこんで遅くなってから寝た。

## 逮捕

この早朝、事件が起きた、路地を入ってくる乱れた靴音が聞こえた、ドン、ドン・・・玄感のガラス戸が鳴った。「おはよう、立野君」。玄関に近い八畳間に寝ていた小林がしわがれ声で返事をし、起きていって、玄関のガラス戸を開けた。立野はしまったと思ったが、遅かった。「やあ、君は小林君だね、・・・小林多喜二君だろう。いいところにいたな。君もいっしょに行つて貰おう」。

特高第一課長中川らであった。2人は杉並警察署に連行された。

2人はせまい取り調べ室に入れられ、警察の朝飯弁当を供された。味噌汁は塩辛いだけで味がなく、飯は弁当箱のイヤな匂いがした。2人とも少しばかり飯を口に運んだだけで、やめた。

中川警部は、2人が食後のタバコをすっているのをジロジロみていたが、そのうちに小林にむかって、「小林君は、大阪ではうまくいいのがれて出てきたが、こんどはお膝元だから、そうは行かんぞ」

「何だって？」多喜二は充血した出眼をグルッとさせ、乾いた唇を尖らせた。「オレ、大阪で済んできたばかりじゃねえか」

「いや、済まんよ、これからが本物の調べだよ」

中川は、「2人一緒じゃ、まずい」といい、多喜二だけ巣鴨署に送ることにした。小林多喜二の和服をややだらしなく着た小柄な姿は、杉並署の白くらい、寒い、冷たい廊下を曲がって消えた。

いわゆる文化人シンパ事件であった。

1930年8月21日から31年1月22日まで、多喜二は豊多摩刑務所に収監された。

手紙を書くために、母セキは字を習った。多喜二は立野は多喜二より少し早く保釈になった。数名が立野を出迎えにきたが、その中に小林多喜二の小柄な和服姿があった。

多喜二は成宗と阿佐ヶ谷の間の墨屋の二階に間借りしていた。立野の家と僅かの距離だったので、かれはしじゅうせかせかと下駄の音をたててやってきた。(立野、179ページ)

そのころ立野の家に村山箒子がしじゅう遊びに来ていた。立野が入獄しているので、妻・春江を千葉から呼び出し、説得し、箒子の夫の村山知義も入獄しているので、差し入れや面会などにしじゅう連れだつて刑務所通いをしてくれた。小林多喜二と箒子は、その救援活動の差し入れや、激励慰問の手紙の往復などで親しくなったが、まだ友達という間柄ではなかった。

村山箒子(かずこ)(1903-46)は、高松の千金丹岡内家の長女、童話作家・詩人。自由学園卒業。村山知義(1901-1977)は、1924年に、箒子と結婚した。彼女は『少年戦旗』の編集長になった。

村山箒子は、ある日ブラリとやってきて、蔵原惟人がひそかにソヴェトから帰ってきているといい、「会いたがっているわよ」と言った、そこで蔵原に会う手筈を打ち合わせた。立野は、お節介にも、小林多喜二を蔵原に会わせたいと考えた。「蔵原に会えるか、ようやく、おれ、念願がかなったよ」と、小林は無性に喜んで、会合の場所をきめてきた。(立野、183ページ。)

蔵原惟人(1902-1991)は、東京麻布区に生まれた。父は蔵原惟郭(これひろ)で、代議士で、教育家であった。その次男であった。東京外国語学校のロシア語科かを卒業した。ロシアに留学し、1926年に帰国し、プロレタリア芸術連盟に加入した。小林多喜二は自分の文学的指導者と見ていた。<sup>(14)</sup>

3人で蔵原と、その秘密家であった。蔵原によれば、彼は4月に出国し、上海に渡り、中国人により船で大連に上陸し、汽車でハルピンへ行き、朝鮮

人の案内者により、夜間ソ連国境を越え、監視のソ連兵に捕まり、留置所に入れられた。三日間いて、モスクワから迎えがきて、それと一緒にシベリア鉄道でモスクワへ行った。プロフィンテルンで、日本から行った代表の紡績女工が2時間にわたる大演説をした。これは飯島喜美であろう。モスクワで中条百合子と湯浅芳子が歩いているのに出会ったが、知らぬ顔をしていた、など話した。小林多喜二はその間黙って聞いていた。彼は「3・15」を書く前、上京して蔵原を訪問し、会うのは二度目である。そして作家同盟の組織問題を蔵原は語った。立野は、モヤモヤしていたものがある程度解決がついたような気がした。小林多喜二も2、3質問し、彼なりの納得がいて、「うん。そうなんだなあ」と、感に堪えたような肯き方をしていた。かれらは、ずいぶん長く話した。蔵原が出てから20分ほどして3人はその家を出た。「おれ、今日の蔵原の話で、大分わかったよ」と、小林多喜二は喜ばしげな表情でいった。

蔵原の意見は、論文となって、機関誌「ナップ」で「プロレタリア芸術運動の組織問題」として出た。

村山篝子は蔵原惟人が好きだった。村山知義は女性問題が多く、夫婦間がうまくなかった。篝子と姑との折り合いもよくなかった。そのため篝子の愛情は蔵原に向いたのである。蔵原も篝子を愛していた。世が世なら、2人は結婚していたはずである。多喜二と篝子も友人として仲がよくなった。2人は同じ年であるが、多喜二は篝子に丁寧に接した。手紙も、篝子に見下されないように、しっかり書いた。

7月に、上落合の作家同盟保温部で第四回臨時大会が開かれ、小林多喜二が推されて書記長になった。「とうとうおれを書記長にして・・・どうする気だっけ？」小林は不服面をしたが、それでもまんざら興味がないでもないらしく、いそがし気に飛び歩いていた。

小林多喜二は馬橋に一戸を構え、母と音楽家の弟を北海道から呼び寄せて、一緒に暮らした。八畳、四畳半、三畳くらいの平屋建てで、彼は八畳を書斎にして、そのまん中に古ぼけた机をすえ、壁際には数十冊の書物を垣根のよ

うに並べていた。(立野, 189ページ)

文化運動は、ただ1つの方向へ向かってしゃにむに推し進められた。「こうなると、脱落者ができるぞ、脱落者が・・・！」小林多喜二はしきりにそういった。

その後、1931年10月、小林多喜二は共産党に入党した。

このころの共産党の中央部は混乱していた。それは非常時共産党といわれる時期で、1931年1月から中央指導部が再建されていたが、同時にスパイMが活躍した時期でもあった。10月に党外ではナップがコップになった。

1932年ともなると、共産党内外ではとんでもない事件が頻発した。多喜二の地下活動時代である。8月15日、尹基協射殺事件、9月14日、平安名常孝殺害未遂事件、全協の天皇制打倒綱領採用事件、10月6日、大森銀行ギャング事件、10月30日、熱海事件などである。

尹事件は、全協（日本労働組合全国協議会）の中堅幹部・尹をスパイとみため、党東京市委員長村上多喜雄が拳銃で殺害したもので、平安名事件も同様で、彼をスパイとみて絞殺と刺殺を図ったものである。全協に天皇制打倒綱領を押しつけたのは、共産党が非常に低い政治水準であったとしか言えない。大森ギャング事件も同様で、すべてスパイMの指導であったとしてもそれに誘導された方も悪いだろう。尹事件と銀香ギャング事件はスパイMが指令したもので、平安名事件そうだろうとされる。スパイMは全協に天皇制打倒綱領を押しつけようとし、それに反対する松原、尹、変安名を殺させようとし、反対派を少なくし、実現させた。これにより全協は治安維持法の対象となり、弾圧されるのであった。これがスパイMの発案ならば、彼は大変な「政治家」である。

多喜二は立野を自分の家へ呼び出し、入党を誘った。立野は拒絶した。そこまでなっていないというのだ。だが彼は政治活動をしないということで釈放されたのだった。多喜二は立野が転向したことを知らなかったのであろう。

その日、蔵原が捕まった。立野が多喜二の家からの帰り道、村山籌子と妻

に出会って、それを知った。立野はすぐさま多喜二の家へ戻り、それを知らせた。この時、多喜二はもぐる準備をしていた。

この時の検挙はコップへの弾圧で、蔵原の後、中野と村山知義も検挙された。宮本と杉本はもぐり、その後、小林多喜二ももぐった。

彼はまた「党生活者」を書いた、これは死の直後『中央公論』に発表された。「おれは、党的生活をすることによって作家としての自己を高めるんだ」と立野に言った。

1931年に、多喜二は、滝に結婚を断られる。1931年に、伯父・小林慶義が死去する。

### 若林つや子

若林つや子は、ペンネームで、本名杉山美都枝（みつえ）である。1905年11月12日、伊豆の下狩野村（現。修善寺町）で生まれ、家は農家だった。5人きょうだいの長女だった。静岡県立女子師範二部を大正15年に卒業し、伊豆市で2年間小学校教員をした。小説を書くことを志し、「女人芸術」の読者になり、筆名を若林つや子として投稿した。教職をおわれ、飽和6年に日本プロレタリア作家同盟に加入した。加入間もなく、書記長の小林多喜二から手紙（1932年1月）が来た。内容はこうだった。このあいだ、作家同盟の常任委員会で、新しく同盟員になった人々の作品指導を個人的にしてみたらどうか、ということになった。さしあたり小林多喜二が若林と阿蘇弘君の2人をうけもつことになった。婦人作家の作品は、とにかくエピソード的な短いもの多いのは遺憾である。もっと積極的な主題をガッチリ取り組んで、あなたには長いいものを書いて貰いたい。手紙よりもお目にかかってお話をした方がよいと思うので、一度僕の家へお出下さい、というものであった。

小林多喜二は阿蘇弘（16才の少年工）にも4通の手紙を出している。

若林は、この初めの手紙のすぐあと、下落合の同盟事務所に行き、多喜二の会合のあとのほんのちょっとした時間で、いつでも来るよう言われ、多喜二はタバコの箱にもう一度地図を書いて渡した。

2度目は馬橋の多喜二の家に訪ねて行った。それから阿佐ヶ谷の、文士などのよく行く喫茶店へ行った。ごく初歩的な指導で、まず志賀直哉をたんねんに読むよう言われ、若林の書いた小説を詳しく批評してくれた。

3度目は、新宿の不二屋だった。若林の小説についてこまごまといってくれた。小説の場合でも「こんなに細かく批評して注意をしてもらえるのは有り難い」と、彼女は思った。基本的な勉強になるものを読むよう言われ、3時間くらいだった、すべて文学の話だった。

4度目が最後で、六本木の通りであった。喫茶店にちょっと入り、すぐ出て、麻布の二業地か三漁地を歩きながら話した。生活が変わるから、もう面倒を見て上げられない、小説が書けたら立野信行にみてもらうように、であった。「二の橋」から若林は電車に乗った。それを多喜二は電柱の影に立って見ていた。この時、1932年5月15日の5・15事件の号外が電柱に貼られていたのを彼女は見ているので、16日以降のことであろう。この麻布二の橋のたもとからほんの百メートル程の麻布妙名寺境内の二階屋に、多喜二は伊藤藤子と移り住んでいた。

若林の親友は、杉本智恵子であり、彼女は杉本良吉の妻であった。

若林は、小林多喜二には何か特別な気持ちはもちませんでした、(多喜二から)何も特別なそぶりも感じられませんでした、と書く。

しかし若林は、「この人ならば」と思う、「その人の仕事、研究、感情等でほんとうに崇拜でき、一緒にやってゆけるんだったら、自分の凡てをその人のために投げ出してしまってもよい」と書く。

多喜二は、つや子を妻にしたいと、ある人に打ち明けた。しかし党幹部が反対した。つや子は、この話をおそらく貴司から聞いた。<sup>(15)</sup>

こうして2人は心の中だけの愛情を持った。

村山知義は、1930年後半、半年、豊多摩刑務所に収監された。それゆえ、多喜二と同じ時代である。篝子は夫と共に多喜二を救援したわけである。1946年8月、篝子は死去した。

なお、1932年のシゲティの音楽会の切符を多喜二に送ったのは、村山箒子である、と山崎怜先生。この件はinternetでもその可能性が論じられている。私の著書では間違ったようだ。

多喜二の最後の隠れ家は、村山箒子が世話をした。(山崎怜)

## 麻布時代など

日本プロレタリア作家同盟編『農民の旗』新潮社 昭和6年11月に、「不在地主」の削除部分が「戦ひ」として発表・所収された。小説「不在地主」は、誰でも読めるように、全文ルビがふってある。

「小林は書記長に選出された頃、どんなことをしても一日に二枚は小説を書いているのだと話した。」(宮本百合子「同志小林多喜二の業績」『宮本百合子選集』第7巻、60ページ)

小林多喜二は、地下にもぐる前までは、小説は丹念に下書きをして、さらに二度も稿をあらためた。執筆している時、油が乗ってくるとペンを置く、上すべりをするのを怖れたからだ、と、田辺に語った。

文化芸術運動の方向転換の渦中に書記長として多端な活動をしながら、少しの時間をみつけては時計を机の上に置いて、一枚書き、二枚書きしていた。しかし運動が進展し、指導者としての彼からついにその少しの時間と書齋を奪ってしまった。そこで多喜二はペンと原稿用紙と一冊のレーニン主義の本とを小さな風呂敷堤にして、それを懐に入れて、駆け回り、どこでも取り出して書いた。1931年から32年の春にかけて、のこと、「努力だよ、俺たちにとってこれ以外になにがある！ レーニンの努力を見ろ、バルザックの努力を見ろ！」多喜二は田辺にこう語った。(田辺耕一郎「レーニンの作家としての同志小林多喜二」1933年5月、internet)

多喜二はプロレタリア文学をボルシェビキ化するために、蔵原とともに努力した。しかしボルシェヴィキ的小説はよほど才能がなければできない。一方、矛盾するが、プロレタリア文学の大衆化も考えた。だが実際はできなかつ

た。あるいはしなかった、貴司山治が大衆的プロレタリア作家だが、2人は彼を非難する。これも矛盾している。

葉山嘉樹は、「小説を書くのに理論なんかいらねえ」と言い、小林多喜二は蔵原の理論がないと好い小説が書けないと考えた。人によって違うのである。蔵原も良い弟子を持って幸運だった。もし小林多喜二がいなかったならば、蔵原の理論は空念仏になっていただろう。理想を言えば、プロレタリア文学の大衆化は、松本清張のような仕事をしなければ達成されたとは言えないだろう。

宮川寅雄談話として、寺出道夫「31年テーゼと創案」と「32年テーゼ」に関する談話、が『三田学会雑誌』vol. 104。2011年4月で紹介された。

1932年10月30日の熱海事件で、党首脳部の大半と全国地方指導者の多くが検挙され、残ったのは、宮川寅雄、児玉、源五郎丸、田井の4人であった。宮川が担当していた専門部組織「赤旗」編集局、雨民部、AP部が残った。APとはアジプロつまり情宣である。AP部には、宮本、野呂、渡辺多恵子、秋笹政之輔、辻がいた。辻は小林多喜二のペンネームだという。前述の4人からなる中央部も、12月16日、牛込で再建のための会合をする時に、一斉検挙された。以後、AP部に所属していた人々を中心として、中央部が再建された。

この事件を振り返ろう。1930年ころから、日本共産党は、スパイ政策のため警視庁特高課の手の中にあった。ソ連の動きを知るために少し残しておくことにした。<sup>(16)</sup> スパイを特高の主任たちは使っていたが、それぞれお互いに秘密であった。だが毛利基課長（1891-1961、1932年に初代特高課長）にだけは伝えた。そのため毛利課長は凡てを知っていた。

31年テーゼと32年テーゼ<sup>(17)</sup>は異なっていたから、全党で討議して全国会議を開く必要があった。10月30日、指導部と主に中央からの地方オルグが熱海に集まることになった。スパイ松村がすべて準備した。しかし彼は中央委員長風間丈吉に突如中止を持ちかけた。そこで警察は、党本部が行かずに地

方代表たちだけがいる熱海で逮捕した。会議に参加しなかった党中央も次々逮捕された。紺野与次郎、風間委員長、岩田義道、ついで久喜勝一、長谷川、藻谷、三村、石田が逮捕された。スパイ松村は偽装逮捕され、姿をくらます。残った中央委員が、宮川寅雄、田井為七、源五郎丸芳晴、児玉静子の4人だった。宮川寅雄（1908-1984）は、早大中退、美術史家である。源五郎丸はソ連から32年テーゼを持ち帰った人である。この4人で臨時指導部を作り再建しようと会議をしたところ、12月1日、検挙されてしまった。全国で1500人が捕まり、共産党は壊滅した。

ところで中央員候補がいた。大泉兼蔵、山下平治、秘密にされていた野呂栄太郎である。彼らは中央委員になった。暮頃、野呂を中心に再建運動が進められた。大泉はスパイであり、農民部長だった。山下平治はアジプロ部にいた。山下に、ソ連帰りの飯島喜美が、そして内海秋夫（＝藤原）の3人は、労働者で、反野呂だった。野呂はインテリだから彼らはきらった。野呂も形式的にアジプロ部だった。労働者3人は大泉と組んで、野呂と争った。そうこうしているうち、ソ連から山本正美<sup>(18)</sup>が帰ってくるようになった。彼は救世主のように思われた、32年12月半ば到着した。1933年1月半ば、山本正美を中心に中央が再建された。

ここで多喜二は野呂と会っただろうか。辻が多喜二のペンネームだとすれば、同じアジプロなので、会った可能性がある。しかし野呂は秘匿され、アジプロ部だったことが形式的だとすれば、会わなかったであろう。それに野呂は11月まで鶴沼で療養中であつた。再建のために12月に東京に上つたので、伊藤純が推測するように多喜二が中央委員だったら会ったであろう。ただし多喜二が中央委員だったとはまだ証明されていない。

ちなみに多喜二が殺された時の共産党の中央は、委員長が山本正美、中央委員が野呂、大泉、谷口、三船であつた。中央部5人のうち、2人がスパイであつた。このうち三船留吉が多喜二を売るのである。

佐多・窪川・稲子は、多喜二との非合法の連絡時代に、付き合いが濃くなっ

た。彼女は語る、

みんなで笑ってばかりいた。ちっともすごんでいないのです。ああいう時の人間の神経というのは面白いですね。多喜二さんが四谷近くの本屋さんで立ち読みしているのを、私は電車で通りかかって偶然にみつけて、はっとして、こちらがあわてた。

多喜二という人は、わたしどもが作家であることに悩んでいる時に、非常に自覚的に作品を書いていた。その点に敬服する。その自覚がもぐっていかざるをえなかった。私がかよくよしておりました時には、共産党員を描けということが、すでにいわれていたのです。

多喜二さんは、政治と文学があその当時実为一体となっていて、・・・作家として政治に片寄っていたわけではないのですね。（『日本の文学』付録73）

ちなみに当時、女性たちは、小林多喜二に向かっては「小林さん」と呼んでいた。佐多が言うように、共産党員をえ描けというのでは、作家同盟の少なからぬ人々は、左翼文学小児病に陥っていたとしか言えないし、文学の大衆化を唱えた路線にも反している。

貴司山治（きし やまじ）は、本名、伊藤好市、鳴門市生まれ、大阪で新聞記者となり、東京で売れっ子大衆作家となる。昭和2年に東京に移る。1931年に作家同盟に中央委員となり、機関紙の編集をした。

多喜二が殺される3週間前、非合法の多喜二から連絡を受け、貴司は彼に会いに行った。その半年前に多喜二から右翼偏向だといって作家同盟の役員会から追い出されたばかりだった貴司は、心中は複雑であった、後に小説「子」でこの時の事を書く。もう一度2月に会ったようで、作家同盟の組織たてなおしについて相談された。その10日ほど後に多喜二は殺された。

1932年、貴司は最初の検挙拘束を受けた。この時期貴司は共産党に活動資金を献金するなど、相当な覚悟で左翼活動に協力していた。

貴司に非合法の多喜二から呼び出しがあり、1933年、渋谷の道玄坂の小さな天ぷら屋で会った。

一度は、出獄早々の貴司を呼び出して、相談した。作家同盟のフラクである鹿地亘と対立し、自分の方針を伝えることができなくなった、そこで貴司を中央部に入れ、鹿地にあたらせようとした。フラクでない人間をフラクである人間にあたらせるために使いというのは組織的に間違いで、そんなことよりもまず鹿地の組織的な処置が先決問題だと言って、貴司ははねつけた。それから一〇日ほどで小林は殺された。(貴司山治net資料館、私の文学史、伊藤純「小林多喜二と虐殺前後の人間群像」)

ここでフラクとはフラクションのことで、党員グループのことである。貴司の考えはほぼ妥当だろう。なお、貴司の長男は、多喜二が作家同盟の党フラクションより上位の(党)中央委員だったとおもわれるが、と書いている。しかしこれはまだ分からない。

小林多喜二は日本反帝同盟の執行委員もしていた。1932年12月に日本労働救援会の書記局員、小林雄二は、吉祥寺618の江口渙の自宅で集会があり、出席した。上海で行われる極東反戦会議支援運動の方針案を決定するためだった。集まったのは、江口(ソビエト友の会書記長)、佐々木孝丸、その他二名、そしてここに小林多喜二も参加してきた。(小林雄二「小林多喜二と上海反戦会議」)

## 通夜

二月二〇日、多喜二が殺された。

昭和8年2月、川口浩の家に立野はいた。そこへ夕刊が投げ込まれた。それは多喜二の死を伝えていた。立野は川口の家を出、歩いて馬橋の小林宅へ行った。戸が閉まっていた。彼は一たん家に戻り、出直した。多喜二の遺体が戻ってきてすぐだった。

貴司は相当な写真マニアであった、多喜二虐殺直後の通夜の写真の原板や別のカット、親類たち中心のカットも、貴司の長男伊藤純が発見した。

貴司は、1933年8月号の『改造』で小説「子」を出し、その中で、多喜二の遺体とされるものに、「絆創膏の小さな切れ端が左の乳の下にはりつけられてあった」と書いたが、誌上では削除された。つまり、警察関係者が付けたのだらうが、人に見られてはまずい傷だったのだらう。

ここに参加した人は、原泉、田辺耕一郎、上野壮夫、立野信行、山田清三郎、鹿地亘、千田是也、壺井栄、岩松惇、岡本唐貴、小坂多喜子（上野の妻）が写真に写っており、それ以外では貴司山治、佐土哲二、「時事新報」の記者・笹本寅、カメラマン前川、母、姉チマ、その夫佐藤藤吉さん、などである。

通夜に参加した3人の美女（江口の表現）は、田口滝子、その妹のミツ、滝子の小学校時代の同級生・岩名雪子（1907-不明?）である。岩名は劇作家になる。

佐多（窪川）稲子（1904-1998）は、本名 佐多イネ。小説家。1926年窪川鶴次郎と結婚した。「キャラメル工場から」でデビューした。戦後、佐多となる。

原泉水（はらせんこ、1905-1989）は、多喜二の通夜に家にかけてつけた最初の人で、女優、本名政野。戦前の芸名は泉水。1930年、中野重治と結婚。中野重治は豊多摩刑務所で昭和7年から2年間いた。その入獄中に多喜二の死を知った。

佐土哲二（1908-不明?）は、国木田独歩の次男で、後妻・治子との子。榎本武揚の孫。彫刻家。千田とともに多喜二のデスマスクを作った。

岡本唐貴（とうき、1903-1989）は、プロレタリア画家、洋画家で、1929年に日本プロレタリア美術家同盟に参加した。多喜二の通夜に呼ばれて、彼の死顔を描いた。

山田清三郎（1896-1987）は、『種まく人』『文芸戦線』の同人で、その後、『戦旗』の編集をした。

千田是也（1904-1994）は、演出家、本名、伊藤罔夫。多喜二のデスマスクをとった。

田辺耕一郎(1903-91)は、広島出身。日本プロレタリア作家同盟に加盟、「ナップ」「戦旗」の編集をした。

立野信之(1903-1971)は、千葉師範中退、除隊後、1928年に小説でデビュー。1930年検挙され、31年に転向。

上野壮夫(たけお、1905-1979)は、早稲田高校露文科中退、昭和2年労働芸術家連盟書記長、昭和4年「文芸戦線」に参加。前衛芸術家連盟に加わり、日本プロレタリア作家同盟に加入。『戦旗』の編集と戦旗社運営にかかわる。通称ソウフ、戸籍名はソウフ。小坂多喜子と結婚する。(文献)堀江明子「風の詩人-父上野壮夫とその時代」がある。

壺井栄(1899-1967)は、1925年に上京、結婚。児童文学者になる。

多喜二と共に捕まった今村恒夫は北九州の炭鉱夫だった。多喜二と相前後してもぐった人だ。その時、共青の指導にあたった。捕まり、市谷刑務所に2年入り、拷問により罹病し、入院し、1年後、1936年12月9日、26才で死去した。

当時の政治犯や思想犯との面会は、立ち会い看守の厳重な監視の下に許された。会話は許される範囲の事柄だけであった。多喜二については語ることを許されなかった。

昭和8年2月、豊多摩刑務所に村山知義が入獄しており、篝子と息子・亜土が面会に行った。この時、篝子はハンドバッグに白墨で「タキジ コロサレタ」と書いて知らせた。(村山、10ページ)

壺井繁治も同じであった。妻の栄が豊多摩刑務所に面会に行ったが、多喜二が殺されたという会話は許されなかった。そこで栄はほんのスキを狙って、メモを繁治に見せた。(『壺井繁治全集』第4巻)

多喜二が殺された頃、野呂、山本正美、辺見重雄の3人は、多喜二の馬橋の家から七、八軒の所に住んでいた。野呂は馬橋三丁目の一軒家に住まわせ

られた。3人は「杉並の由ある三人」の名で香典を届けた。野呂たちは、多喜二が居を移しているのでは、会えなかったと思われる。野呂は多喜二の死後、盲腸炎を再発し、入院した。(山崎元・稿『しんぶん赤旗』2000・4・30)

## 没後

1933年フランス共産党の『ユマニテ』で、多喜二の死の直後に追悼記事がでた。

『党生活者』は、初出が『中央公論』で「転換時代」として出た。四、五月号であった。4月号は三月二〇日発売。題名の変更は、編集者と貴司と立野とが協議して決めた。

プロレタリア作家同盟版の『小林多喜二全集』の第二巻だけが出版された。

1933年夏、宮本顕治から貴司山治は小林多喜二全集刊行の相談をうけ、世話係を引き受ける。だが貴司も検挙された。その後自由の身になって、1935年ついにナウカ社から『小林多喜二』全五巻を刊行した。

1934年2月、作家同盟は解散させられた。

多喜二が殺された1年後、小林多喜二をしのぶ会が行われた。1934年2月20日である。(山崎怜 調べ)

## 北海道出身の他の同時代者たち

本庄陸男（むつお）（1905-1939）は、北海道当別村に生まれる。1919年、北見の高等小学校を卒業し、少し勤め、カラフトの製紙工場で働き、文学に親しむ。1920年に上京、1921年に青山師範に入学。『新興文学』に当選する。卒業後、教職につく。文学活動をする。1928年、前衛芸術家連盟に加わり、全日本無産者芸術連盟（ナップ）に参加する。ナップ傘下の日本プロレタリア作家同盟では、農民文学委員会責任者、東京支部長、その他、プロレタリア科学研究所、新興教育研究所などの活動にも参加する。1929年に拘留され、1930年に明治小学校を免職され、プロレタリア文化文学運動に専念す

る。1932年、山田清三郎の推薦で、非合法下の日本共産党に入党する。というわけで、彼は小林多喜二とも会ったのではないか。

小熊秀雄は、1901（明治34）年、小樽市稲穂町東8丁目4番地で生まれた。父は、三木清次郎（1864年生まれ）で、洋服・毛皮仕立て職人だった。母は小熊マツ。小熊は1894年生まれで、7才上の姉ハツがいた。秀雄は三木姓であった。マツが入籍していなかったので出生届は出されず、私生児として入籍した。1904（明治37）年10月に母マツが33才で死去した。秀雄は3才だった。姉ハツは小樽の安田家へ養女として入った。この年、小樽大火が起き、2481戸が焼失した。父はナカと結婚した。父、継母、秀雄、一家は、稚内へ移住した。秀雄は小学校へ入った。まもなく、カラフトへ渡り、豊原へ移住した。1912年、11才で、秀雄は、父方の叔母の住む秋田県大館の小学校へ転校した。その後、秀雄は、カラフト西海岸の泊居に移った。1916年、15才で、尋常高等小学校を卒業し、漁師や、昆布とり、養鶏場、炭焼き、農業の手伝い、材木人夫、パルプ工場の職工などを転々とした。この時、右手の食指、中指の2本を、機械に挟まれて、失った。その間、短歌を作る。1921（大正10）年、20才、徴兵検査で、母マツの私生児であることを知り、それまで三木姓であったが、小熊姓を名乗る。3才の時別れた姉ハツが旭川に住んでいることを知り、訪ね、18年ぶりて再会した。小樽で呉服店店員となり、反物の行商をする。このころ小樽の人口は11万1939人であった。1922（大正11）年、旭川の姉の所に寄寓する。「旭川新聞」社会部の記者になり、やがて文芸欄を担当する。このころから詩作をする。1925年に結婚する。1928年、27歳で上京した。雑誌社や業界新聞で働く。1931（昭和6）年5月、30才、プロレタリア詩人会に参加、1932（昭和7）年1月、31才でナルプに参加した、詩人会がナルプ（国際革命作家同盟恵モルプの日本支部）に所属したからである。1933年、32才、多喜二の悲報で集まり、藤森成吉ら3人と捕まる。1940年11月20日、37歳で死んだ。

詩 「小熊秀雄詩集」「飛ぶ櫓」「長長秋夜」「流民詩集」

童話「或る手品師の話」「焼かれた魚」

漫画原作「火星太郎」

時評 「大波小波」1937-39 の「都新聞」

「小熊秀雄全詩集」思潮社 1971。「ある手品師の話」晶文社 1977

「小熊秀雄全集」創樹社。「小熊秀雄詩集」岩波文庫、「評論集」思潮社 1966

佐藤喜一「評伝 小熊秀雄」ありえす書房 1978

西田信春は、1903年、北海道の新十津川村の生まれであり、村長の息子で、札幌一中へ行き、東大に入学。新人会に加わり活動する。卒業後、鉄道従業員組合書記になる。兵役を勤め、無産者新聞に入る。27年共産党に入る。32年共産党九州地方委員会を作り、委員長になる。33年2月、路上で捕まり、ひどい拷問を受け、黙秘を続ける、11日虐殺される。30才であった。多喜二虐殺の9日前であった。故郷、新十津川町に「西田信春碑」が1990年にできる。<sup>(19)</sup>

上田茂樹（1900-1932？）は、札幌出身。1932年、党中央委員になる。26年入獄、32年スパイの手引きで、逮捕され、そのまま、遺体も分からず。

虐殺された、上田、岩田、西田、小林多喜二、野呂、は、岩田を除き、皆、北海道人であった。

戦前の日本人は、天皇を神のように崇拜し、共産主義者はコミンテルンを神のように崇拜した。党员ではなく左翼で、最も自主的な頭脳を持っていたと思われる羽仁五郎でさえ、野呂栄太郎の『日本資本主義発達史』を、「コミンテルンのテーゼとぴったり一致していた」と誉めるのである。コミンテルンの日本問題にかんするテーゼは、ブハーリンやクーシネンらによって作られたが、クーシネンは保身の達人であり、ブハーリンは大変な知識人だが、

共に日本をよく知っているわけではない。野呂栄太郎の方がよく知っている。この思想構造が問題である。

## 文 献

- 宇佐見昇三『蟹工船興亡史』凱風社  
『物語・北海道文学盛衰史』河出書房  
奈良達雄『若杉鳥子』東銀座出版社  
『多喜二奪還事件』資料集。2。  
佐藤三郎「一場の春夢——伊藤ふじ子と「党生活者」」(『星灯』第4号, 2017年2月)  
阿部誠文『小林多喜二』はるひろ社 1977年  
「山崎怜先生インタビュー」(『河上肇記念会会誌』114-7)

## 注

- (1) 立野信之『青春物語』河出書房新社 昭和三七年, 103ページ。
- (2) 国崎については、加藤哲郎『モスクワで粛清された日本人』青木書店 1994年, 川上武『流離の革命家』勁草書房 1976年。
- (3) 山本懸蔵は1928年の第一回衆議院選挙に出て、小林多喜二が選挙応援をした人である。ソ連で山本は国崎その他を売ったが、今度は野坂参三に売られる。
- (4) インターネット, 「白樺文学館 多喜二ライブラリー」「新聞記事から追う多喜二の足跡」2004年現在で、幾つかの記事がある。
- (5) これは前年のプハーリン報告が元になったとされる。
- (6) これはソ連の引き回しのため、国際的には有力な物ではなかった。1939年に解散した。
- (7) 2月と、立野は言うが間違いだろう。
- (8) 立野信之(1903-1971)は、千葉師範中退、除隊後、小説でデビュー。1930年検挙, 31年転向。
- (9) 橋本英吉, 共同印刷争議以来の徳永直の親友。
- (10) 立野は四月とするが、誤り。
- (11) 立野は、そう綺麗に書いているが、お金が問題であった。
- (12) 片岡鉄兵は、岡山出身。慶応大学仏文科中退, 1921年に文壇にでる。新感覚派に属する。1928年ころから左傾する。
- (13) 「時事新報」記事からの紹介だ、と、この筆者。
- (14) その後、1932年に検挙され、懲役7年で、満期出獄した。1941年、中本たか子と結婚する。非転向とされるが、実際は転向した。
- (15) 伊藤純「若林つやと小林多喜二」(徳島県立文学書道館紀要『水脈』12号, 2014年3月)
- (16) 立花隆『日本共産党の研究』下, 226ページ。

- (17) コミンテルンでオットー・クーシネン（スターリン主義者、保身の名人）が責任者となってつくられた。片山潜，野坂参三，山本正美，国崎定洞，源五郎丸らが作ったとされるが，主に山本が作った。
- なお，この時の状況について，河藤哲郎『モスクワで粛清された日本人』青木書店 1994年，211ページ。アイノ・クーシネン『革命の墮天使たち』。
- (18) 山本正美（1906-1994）昭和2年，モスクワのクートベに入学する。「32年テーゼ」の作成に加わる。日本で昭和8年に委員長，同年検挙される。
- (19) 石堂，中野，原，編『西田信春書簡・追悼』土筆社 1970。